



TITLE:

## <Chapter. 2>日本民謡とはなにか

AUTHOR(S):

河瀬, 彰宏

---

CITATION:

河瀬, 彰宏. <Chapter. 2>日本民謡とはなにか. CIRAS discussion paper No.72: 日本民謡の地域比較研究に向けて --北海道・山陰道・山陽道の地域性 2017, 72: 6-11

ISSUE DATE:

2017-03

URL:

[https://doi.org/10.14989/CIRASDP\\_72\\_6](https://doi.org/10.14989/CIRASDP_72_6)

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

## Chapter. 2

# 日本民謡とはなにか

河瀬 彰宏

### 1. 日本民謡を分析するにあたって

本研究ユニットでは、日本音楽の伝播・変遷を解明するために、日本民謡を分析対象とする。日本音楽のあらゆる種目のうち、一般的に主流とされる雅楽、能楽、声明などではなく、日本音楽のプリミティブな要素をもつ日本民謡を直接分析することには明確な理由がある。ここでは、日本音楽における日本民謡の位置付けとその特徴を確認しながら、分析対象として選択した理由について説明する。

### 2. 日本音楽における日本民謡の位置付け

日本音楽の種目を器楽と声楽に区分すると、器楽は、雅楽の管絃、箏曲の段物、尺八楽、歌舞伎の演出を支える下座音楽などがあり、あわせても全体の15%程度に留まる。一方で、声楽は全体の85%以上を占めることから、日本音楽は声楽を中心としていることが分かる。

また、声楽は、音楽と歌詞のどちらを主体として構成されているのかという観点から「歌い物」と「語り物」に分けることができる。実際には、両者の中間的な種目も存在していることから、日本音楽は、声楽を中心とし、歌い物と語り物の曖昧さを併せ持つ音楽といえる。

「民謡」という用語は、Volkslied(独)あるいは folk song(英)の訳語として明治期に創出され、京都や江戸などの都会から離れた地方に存在する音楽に対して充てられた。学問上の定義は、自然性、伝承性、移動性、集団性、素朴性、郷土性の6条件を満たすこととされる。1940年代に民俗学者の柳田國男氏は、民謡の作業内容に基づく分類法を考案する。そして、1960年代に音楽学者の町田佳聲氏は、この分類法を改良し、さらに町田氏の分類法に基づき、1970年代に「文化庁方式」が作成される(e.g. 表2.1)。この「文化庁方式」は民謡を

表2.1 柳田・町田の分類法に基づく「文化庁方式」の日本民謡の分類 (Groemer 2002)

I. 労作唄	1. 農産加工に関する唄 2. 林業に係る唄 3. 漁業に関する仕事唄 4. 交通運搬に関する仕事唄 5. その他の仕事唄
II. 祭歌・祝歌	1. 祭事に関する歌 2. 祝儀に関する歌 3. 行事に関する歌
III. 踊歌・舞歌	1. 神楽舞歌 2. 盆踊唄 3. その他の踊歌・舞歌
IV. 祝福芸	
V. 語り物	
VI. 子守唄	
VII. わらべ唄	1. あそび唄 2. 自然の唄 3. 行事唄など、他のわらべ唄

唄う場面と目的に応じて分類しており、とりわけ「労作唄」「神事唄」「芸事唄」の3つだけで全体の90%を占める(Groemer 2002)。

日本民謡は、わらべ歌、民俗芸能とともに民俗音楽に分類される音楽である。日本伝統音楽の系譜に照らし合わせてみると、民俗音楽は一見すると芸術音楽や仏教音楽とは異質であり、日本音楽の特徴を十分に反映していない音楽ジャンルと思われるだろう。しかし、音楽学者の樋口昭氏によれば、わらべ歌は、子どもたちが遊びの中で創造・伝承した歌であり、民謡は、歌うことを主眼として確立され、個人差・地域差・年代差を認めた大人の歌である。また、民俗芸能は、祭礼における神仏への奉納という形式で地域社会の中で伝承された音楽である(小島 1982)。したがって、民俗音楽の様式には、日本音楽の基本的な要素が具体的な旋律として残っており、とりわけ伝承性や郷土性を条件に含む日本民謡を分析することで、音楽の変遷過程や普遍性を解明する手掛かりが得られる可能性が高いと考えた次第である。

以上の理由から、日本音楽の中から一般的に主流とされる舞台音楽や仏教音楽ではなく、日本音楽のプリミティヴな要素をもつ民俗音楽の日本民謡を直接分析することで、日本音楽の地域性を捉える。

### 3. 『日本民謡大観』

本研究ユニットでは、日本民謡の実際の録音ではなく、『日本民謡大観』に掲載された楽譜資料を分析した。『日本民謡大観』は、音楽学者の町田佳聲氏の協力のもとに1944年から1992年までの約半世紀にわたって全国津々浦々の民謡を採集した記録資料である。巻数は全9巻(1990年代に刊行された琉球の民謡を採集した4巻を合わせれば全13巻)である。各巻は、表2.2の順に日本列島の地域別に刊行された。

『日本民謡大観』に収録された資料は、東洋音楽学会から提供された録音資料を採譜したものであり、掲載楽曲は、都道府県ごとに整理されたうえで、子守唄、農作に関する唄、臼唄、建築土木に関する唄、その他の産業に関する唄、山の仕事唄、道中唄、海の仕事唄、祝唄、御座敷唄、さわぎ唄、年中行事唄、盆踊唄、その他の踊唄、の順に並ぶ。また、掲載楽曲の歌詞と、コンテンツ情報として採録地(採譜された当時の地名・旧国名)と日付が記載されている。

楽曲の選別基準は、民謡の歌われていた職業に基づくものであり、明確なジャンル区分が設けられているわけではなかったという見解がある(Groemer 2002)。そのため、複数の職業にまたがる仕事唄の存在や、歌詞と旋律の発生起源が不明な楽曲も少なくない。

### 4. 『日本民謡大観』の研究上の問題点と意義

『日本民謡大観』を研究上利用する際に考慮しなければならない問題は、主に3点あると筆者は考える。

第1の問題は、民謡がもつ旋律の多様性が失われることである。五線譜は、近代西洋音楽を記録するために開発された合理的なシステムである。日本民謡に限らず、プリミティヴな音楽は、常に同一形式で歌われるわけではなく、環境に左右されながら演奏形態が変化する。そのため、民謡を採譜することは、民謡のもつ多様な旋律を一意的に固定して記録することになる。

第2の問題は、採譜者によって記録の隔たりがあることである。旋律を一意的に固定することを容認しても、採譜者の評価基準(着眼点)は異なるため、西洋音

表2.2 『日本民謡大観』の刊行年

巻	地域(篇)	刊行年
1	関東	1946
2	東北	1952
3	中部(北陸地方)	1955
4	中部(中央高地・東海地方)	1960
5	近畿	1966
6	中国	1969
7	四国	1973
8	九州(北部)	1977
9	九州(南部)	1980

楽の12音律の半音よりも狭い微小音程、ユリなどの装飾音がどれくらい譜面上に反映するのかは、採譜者によって異なる。本来、五線譜は西洋音楽のための記録媒体であることから、この問題は民謡を五線譜上に記録した時点で避けられない宿命にある。

第3の問題は、旋律に社会的影響が多分に含まれてしまうことである。上述のように、『日本民謡大観』は約半世紀にわたって刊行された記録資料である。刊行中には、第二次世界大戦、1960年代・1970年代の高度経済成長があり、歌い手は、鉄道車両の普及に伴う交通網の発達、都市環境の施策による物流ネットワークの変化などの社会的影響に曝されており、その間に採録された楽曲の旋律の特徴がいくらか変化している可能性が考えられる。

しかしながら、本研究ユニットの目的を達成するためにあえて『日本民謡大観』に掲載された楽譜を用いる理由は、膨大な数の民謡を聴取しながら一貫した評価を下すことが現実的に不可能であり、一定水準以上の質と量を兼ね備えた記録資料に頼らざるを得ないためである。また、日本民謡に関する他の記録資料は、全国的に統一された条件下で整理されていないため、全国的規模の分析に向かないことも理由に付け加えなければならない。

このような資料の限界を承知した上で、『日本民謡大観』の楽譜資料を研究上利用することの利点は、次の2点に集約される：

- 日本民謡に関するデータ量が豊富であること
- 日本民謡に関する一定水準以上の質が保たれていること

日本民謡の楽譜集は、目的や用途にあわせて多々



図2.1:(a)陰音階の譜例と(b)陽音階の譜例

出版されている。しかし、日本民謡を計量的に分析するためには、データ量が豊富であり、かつ、一定水準以上の質が保たれている必要がある。その点で『日本民謡大観』に掲載された楽曲は、全国的規模のデータ量として申し分がなく、かつ、日本民謡に関する高い知識をもった採譜者や校正者が資料を丹念に選別していることから、音楽学者の小島美子氏は「現状で最も信頼のおける日本音楽の資料」と評している(小島1992)。

## 5. 掲載楽譜の特徴

『日本民謡大観』の編者は、採取した楽曲を大きく2種類に分けて掲載している。この分類は、第1巻刊行当時に主流であった日本音楽の音階論(陰音階と陽音階)に立脚している(音階論については、次章「日本音楽の基礎理論と計算機上の処理」で概説する)。

図2.1(a)および(b)は、『日本民謡大観』の編者らによってそれぞれ陰音階と陽音階と判断された楽譜である。楽曲の採録時に陰音階の旋律と判断された場合には、調号が**♭**3つの調(西洋音楽ではハ短調または変ホ長調)に移調した上で掲載し、陽音階の旋律と判断された場合には、調号が付かない調(西洋音楽ではイ短調またはハ長調)に移調した上で掲載する方針がとられている。

例えば、ある歌い手の旋律の正確な音高を記録するには、本来ならば調号が**♯**4つの調(西洋音楽では嬰ハ短調またはホ長調)もしくは、各音符に臨時記号の**♭**か**♯**を付けて記録する必要があるとする、『日本民謡大観』の掲載楽譜では、これを採譜者あるいは編者が陰音階または陽音階と判断し、旋律を移調した上で調号を使い分けて記録している。そのため、『日本民謡大観』の掲載楽譜から歌い手の正確な音高(絶対音高)を辿ることは極めて難しい。したがって、各旋律の音

高は、相対的な関係として記録されている。

## 6. 日本民謡の電子データ化

『日本民謡大観』に掲載されている楽曲は、各地域の生活と密接に関連した種目が豊富にあり、地域によってその特色は多種多様である。表2.3は、『日本民謡大観』全9巻の目次に掲載された種目を集計した楽曲数上位20位の結果である。ただし、表中の数値はあくまでも『日本民謡大観』の目次に出現した曲数であり、実際の譜例に複数の変型(variant)をもつ比較譜も1曲として集計していることを断っておく。

掲載楽曲数が100曲以上の種目は、盆踊唄、田植唄、地形唄、田草取唄、摺白唄、子守唄である。盆踊唄(1位)と祝唄(17位)を除く他の種目は、すべて労働に関する内容である。

さらに、掲載されている種目の巻数を集計することで、地域による種目の偏りが明らかになる。第9巻にあたる『九州(南部)・北海道編』は、九州地方南部の楽曲を掲載した後に北海道の楽曲が掲載されている。ここでは、北海道編を第10巻とみなした場合の巻数を表2.3に掲載している。100曲以上掲載されている上位6種目のうち、摺白唄のみ掲載巻数が少ない。以上の集計結果から、盆踊唄、田植唄、地形唄、田草取唄、子守唄の5種目は、全国的規模で網羅的に収録されたと見做することができる。

## 7. 日本民謡の計量分析

筆者は日本民謡の地域性を明確にするために、これまでに全国的規模の統計的分析を実施してきた。「地域研究における民族音楽の情報学的分析の新たな指針」(河瀬 2015)の中で触れている内容と一部重複するが、本研究ユニットが実施した先行研究の位置付



表2.3 『日本民謡大観』全9巻の  
掲載楽曲数の種目別上位20位

順位	種目	楽曲数	掲載巻数
1	盆踊唄	546	9
2	田植唄	383	9
3	地形唄	279	9
4	田草取唄	200	10
5	摺臼唄	196	5
6	子守唄	139	9
7	麦打唄	89	7
8	搗臼唄	86	5
9	山行唄	85	8
10	酒屋唄	82	4
11	酒造唄	81	6
12	舟唄	74	5
13	茶作唄	72	6
14	木挽唄	63	9
15	馬子唄	62	7
15	製糸唄	62	6
17	祝唄	60	4
18	糲摺唄	58	4
19	機織唄	43	6
20	長持唄	42	7

けとなるため、ここに日本民謡の地域情報学的研究 (Kawase and Tokosumi 2010) を概説する。

この調査では、人の音楽認知メカニズムの解明に寄与することを目標として、日本民謡の音楽的特徴——旋律に内在する法則——を科学的に捉え、その上で日本民謡の地域性について客観的な判断指標を示すための比較実験を次の3点の方法によって試みた：

- 日本民謡の楽曲データを電子データ化すること
- 旋律中に繰り返し出現するパターンを抽出し、音楽的特徴を決定すること
- 決定した音楽的特徴に基づき、日本民謡の地域性を統計的に明らかにすること

分析には、前述の『日本民謡大観』に最も多く採録された上位5種目——盆踊唄546曲、田植唄383曲、地形唄279曲、田草取唄200曲、子守唄139曲、そしてそれらの変型 (variant) 247曲——の全楽曲を選出・電子データ化した。この楽曲群に対して、確率論・情報理論・言語理論に基づく解析手法を適用することで、旋律中に繰り返し出現する音程推移パターンを抽出した。そして、抽出したパターンの性質を読み解くことによって、日本民謡の全国的規模での音楽的特徴を特定した。この研究から得られた日本民謡の音楽的特徴は、次の3点に要約できる：

- 日本民謡では、一音一音の動きのほとんどすべて

(分析データの97.04%) が完全4度音程を超えない狭い音程範囲内に収まること

- 旋律を形成する最も重要なパターンは、フレーズの最初の音に戻る回帰型のパターンと、フレーズ全体で完全4度音程を形成するパターンの2つであること
- いずれのパターンも音楽学者の小泉文夫氏が提唱する4種のテトラコルドを形成しようとする力学が働くこと

## 8. 日本の地域区分

続いて、日本本土の民謡の地域性を検証するために、使用した楽曲データを地域ごとに整理しなおし、各地域の音楽的特徴の類似性を計る分析を行った。具体的には、上述の3点目に要約した小泉氏の4種のテトラコルドを形成する音程推移パターンの出現確率を地域ごとに算出し、地域間の類似性を多変量解析の階層的クラスター分析 (hierarchical cluster analysis) によって明らかにした。階層的クラスター分析とは、分析する対象同士を定量的な距離尺度に落とし込み、類似する——距離の概念で言い換えれば近い——対象同士を段階的にグループにまとめていく手法である。

ところで、日本列島の地域区分には、統一の見解がないため、日本列島の地域研究を行う際に、どのような地域区分を採用すればよいのかという問題がある。筆者は、2010年に日本民俗音楽学会の大会企画として「日本の楽器の分類」に関するシンポジウムを運営したことがある。各地域の楽器の特色について登壇者が解説し、最後に総合討論を行うという段取りであったが、地域区分に対する質問や討議が幾度となく行われた。行政区画、地理学的特徴、気候、交通事情、文化・歴史、選挙区などの地域区分の基準が取り上げられたが、限られた時間の中で最終的に結論が得られなかったと記憶している。なお、『日本民謡大観』では、北から南の順に北海道篇、東北篇、中部篇(北陸地方)、関東篇、中部篇(中央高地・東海地方)、近畿篇、中国篇、四国篇、九州篇(北部)、九州篇(南部)の構成であることや、都道府県別に見出しを作成していることから、『日本民謡大観』の編者らは行政区画に合わせて地域区分をしていたことが分かる。

日本本土の民謡の地域性を検証するための比較分析では、地理学において一般的に用いられている「八

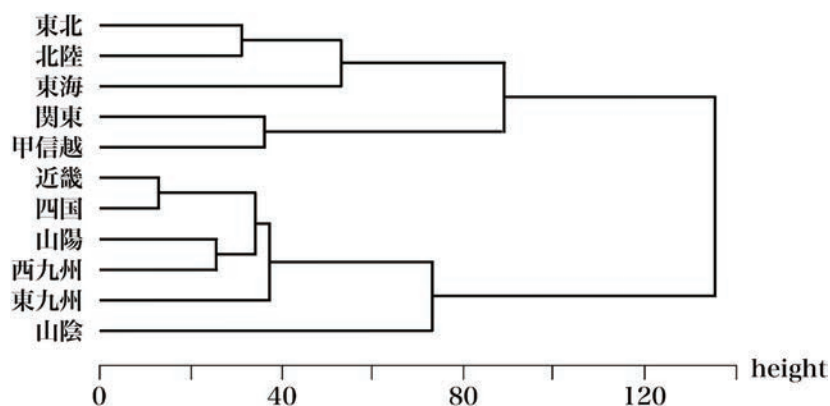


図2.2 階層的クラスター分析による11地域の分類結果 (Euclid距離とWard法を使用)

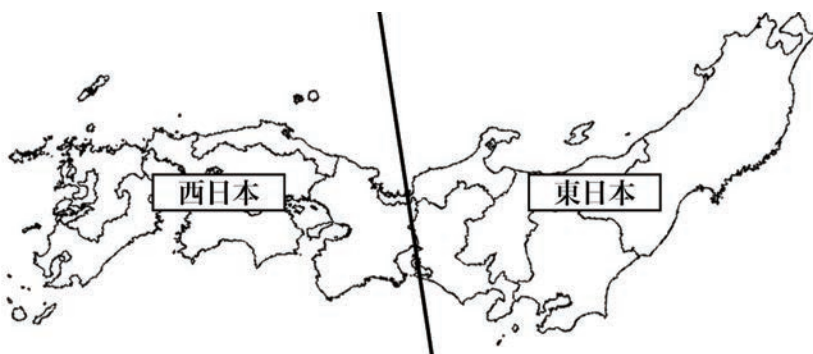


図2.3 樹形図を地図上にプロットした結果 (高さ100でクラスターを二分した場合)

地方区分」——北海道、東北地方、関東地方、中部地方、近畿（関西）地方、中国地方、四国地方、九州・沖縄地方——に基づき、最終的に日本列島を11地域へ区分した（詳細はKawase and Tokosumi 2010を参照）。この11区分に対して小泉氏のテトラコルドを形成する音程推移パターンの出現確率を求め、これらの値を用いて地域の比較分析を実施した。図2.2は、その分析結果の樹形図（dendrogram）である。

樹形図の低い階層（例えば高さ10）に着目すると、地図上の隣接した地域同士がグループを形成している様子が確認できる。さらに高い階層（例えば高さ100）に着目すると、地図上の近畿地方を境目に日本列島が東西に二分される様子が確認できる（図2.3）。この結果を換言すれば、小泉氏のテトラコルドを形成する音程推移パターンの使用傾向に着目した場合に、日本列島が大きく東日本と西日本に二分されるということになる。

民俗学者の宮本常一氏は、田楽——豊穰祈願や魔事退散祈願を目的とする伝統芸能——の調査を通じて東日本と西日本の習俗の差異を論じている（宮本 1967）。日本列島の11地域の分類実験に使用した楽曲データの約半分は、田楽と密接な関係にある盆踊唄と

田植唄であった。その影響が少なからずこの分類結果に影響している可能性はある。

方言地理学の分野では、方言の地域差が東西に二分されるという調査結果があり、上述の日本民謡の分類結果と一致するところがある。しかし、方言学者の柴田武氏は、言語地図の境界線の機能について、方言の地域差を明確に示すものであるが、必ずしも行政区画と一致するものではなく、情報伝達の粗密によって生じた地域差であるという見解を残している（柴田 1988）。

日本民謡の地域差がこの分類実験の通りに東西に二分されるとしても、その境界線はどこにあり、どのような経緯から差異が生じたのか、という疑問は解消されていない。東西の境界線をより精緻に検証するためにも、基礎データを増強し、現代の行政区画ではない藩や令制国（旧国）単位で分類実験を行う必要があるという教訓をKawase and Tokosumi (2010)の調査を通して得た。これは本研究ユニットの実施課題として引き継がれている。

## 参考文献

---

- Groemer, Gerald. (2002), “Japanese Folk Music,” *The Garland encyclopedia of world music East Asia: China, Japan, and Korea*. Routledge, pp.599-606.
- Kawase, Akihiro and Akifumi Tokosumi (2010) , “Regional Classification of Japanese Folk Songs: Classification Using Cluster Analysis,” *Kansei Engineering International Journal* 10 (1), pp.19-27.
- 河瀬彰宏 (2015)「地域研究における民族音楽の情報学的分析の新たな指針」, 福田宏・池田あいの編『国民音楽の比較研究に向けて——音楽から地域を読み解く試み——』. CIAS Discussion Paper No.49, pp.57-64.
- 小島美子 (1982)『日本音楽の古層』. 春秋社.
- 小島美子 (1992)「日本民謡の地域性研究に向けての試論 (その2) ——日本民謡の日本海側と瀬戸内海側」『民俗音楽研究』12, p.2-12.
- 宮本常一 (1967)「民俗から見た日本の東と西」『宮本常一著作集』第3巻『風土と文化』未来社, pp. 81-103
- 柴田武 (1988)『方言論』平凡社.